

〔翻 訳〕

仁 顯 王 后 伝 (下)

作者 未 詳

梅 山 秀 幸 訳

丙子の年 (1696)、世子は九歳におなりになった。元服の礼を行い、世子嬪を定めることになり、王様とお后がみずからお選びになって、青松沈浩という者の女子に決った。

婚礼を行って、世子嬪として冊封なされたが、年は十二歳であった。徳性が高く、王様とお后はこれをおおいに愛し、朝廷の国事の間には昼夜、内殿で、世子嬪と世子を前に置いてむつまじく閑談なされて、さまざまな面白い遊びをなされた。このとき、淑人の崔氏の産んだ王子が三歳になっていたが、気性が非凡であり、王様とお后はこれを愛し、昼夜可愛がって、まるでお后みずからが腹をいためたお子のようにであった。

また、淑儀の金氏にはついに子がなく、かわいそうに思われて、格別に恩恤なされたので、宮中には和気が満ちて、悪心を抱く者はひとりもないはずであった。ところが、ひとり張氏の心だけは相も変わらず、落ち着くことがない。世子はみずからの腹をいためた方で、今は世子嬪まで興入れし、窮まりない栄華と終りのない隆盛を御殿でひとり楽しんでいられたものを、寝てもさめても妖悪なる心をもってこれを逃してしまうことになった。少しでもその怨讐をはらそうとして、妖気をただよわせる巫女と凶悪なる術士を味方に引き入れた。かれらと昼夜謀議をこらし、永肅宮の祖廟に神堂をととのえ、さまざまな色の織物の上にまがまがしい鬼神を祭って、お后の姓氏と生年日時を書いて呪いの箱を作り、くたばってしまえと呪詛をする。また、お后の画像をかけ、宮女に毎日四度ずつ弓で射させ、その画像がずたにちぎれると、紅い緞子の服でおおってお后の身体とみなし、池のほとりに埋めた。このようなことをくり返して三年たったが、お后の身体は磐石だったので、

張禧嬪は快々として楽しまなかった。

弟の張希載のめかけの淑正は娼物で、妖悪なる才藻にはなはだ富んで、嫡妻を殺して正妻になおろうとしたような人物であった。張氏はこれと相談したが、これこそまさに類は友を呼ぶという人物で、凶を窮め、悪を極めた呪詛を行う。まがまがしい骸骨を手に入れてもどり、五色の緞子の服でそれをおおって、真夜中にお後の眠る正宮の北の石段下に埋めた。また、色どりあざやかな絹布でお后のお着物を作ってさし上げることとし、骸骨をこなごなにして内綿の中にそれをしのぼせたが、だれがそうした凶悪なくらみをさとりえたであろうか。朝が来るごとに、こっそりと妖事を終えて、いつわりの恭順をよそおって手紙とともにお着物を中宮殿にさし上げるが、お后は婉曲な言葉で、ことわって、お受け取りにならなかった。

張氏は憤怒し、再三さし上げたが、お后はやはりお受け取りにならない。それでもこりずに毎日、神堂での呪願と妖術を行うこと、とどまることがなかった。邪は正を犯すことができず、妖は徳に勝つことはないというものの、昔から孫臏が龐涓を害したという類があるもの。お后は天寿が不足して、微害をおこむりになるが、これでは人々が天道の正しさに対して疑いを抱こうというものだ。厄回りの不幸な時節というものがあって、妖孽が徐々にお后を侵して行って、庚辰の年(1700)の仲秋に忽然とお身体がおもわしくなくおなりになった。格別に重いというのでなく、寒と熱が交互に往来し、夜半になって、骨の節々が刺すように痛む。平静なときもあって、一進一退であったが、宮中はおおいに心配し、王様は熟慮して、閔公を内殿にお呼びになり、病状をすこしお話しになって、投薬と治療を丁寧になさった。しかし、それはほんのすこしも効果がなく、冬を過ごし、明春となり、お後の白雪のような肌膚があおずんで来て、ときおり黄色い斑が現れたり消えたりした。医者はその病状を判断できず、王様は積年の心労に意気沮喪し、お後の痼疾が強まるごとにいっそう悔い、お嘆きになった。お後の気性があまりにいさぎよく、行いがさっぱりなさっていることを考えると、そのお顔を十分に御覧になることができなかった。お后はお心地がよろしくなく、痛みが激しくても、無理にでもそれをこらえなさる。張氏はお后のやせ我慢をよく理解していて、喜んで、さらにまじないを行った。四月二十三日はお後の誕生日で、王様は命じて、大宴をもうけ、閔氏の一家を集めて歓を尽くそうとなさったが、これはお后の病状が思わしからず、後に恨みを残さないように、ということであったろうか。

お后はお身体が思わしくなく、再三辞退なさったが、王様は許されなかったの

で、天恩が恐れおおく、また世子の孝心を無下におことわりにもなれず、連日の宴が催された。王様とお后は世子と世子嬪の孝誠のお心を喜び、父の閔氏およびその夫人も招かれた。閔府は宮廷への出入りをみだりがましいことと考えたが、お後の病患が一進一退であり、王様の思し召しが格別であることに感激し、参内して、朝見することとした。お後の病色は陰々たるもので、それを見て、心配でならなかった。お后はつつましやかに玉涙をお流しになって、おっしゃった。

「わたくしはいかなる才能もなく、徳も薄いのに、聖上の重い恩をいくえにもこうむっています。しかしながら、近ごろ、心が恍惚として、全身がたゆく、雲霧の中にただよっている心地がいたします。おそらく、久しく生き永らえることはありますまい。今では上は聖上に御心配をおかけし、下は弟・姉妹に連絡することすら容易ではなくなりました。お願いだから、姉妹たちは子女をもうけ、徳を積み、福を取り入れて、子孫末代に至るまで栄華を保つようにしてください」

言いやんで、嗚咽なさったが、宮中のものみなのはお後の悲愴な言葉を聞いてにわかには驚き、危うんで、涙が流れて止まらなかった。実家の婦人たちの心も揺れ動き、涙を無理にこらえて、必死にお后を慰めして申し上げる。

「お後の春秋はまだ洋々として、この一時の病患もすぐにでも平復なさろうとしているのに、どうしてそのようなことをおっしゃるのでしょうか」

そういつて、おいとまを告げ、退出しようとする、お后は悄然とため息をおつきになった。婦人方はみな轎子に乗って、涕泣して、出て行かれた。

このとき、公主と六宮の妃嬪たちが考えて、衣服をととのえてお后にさし上げたが、お后はいっさいお受け取りになろうとなさらなかった。しかし、公主がふたとび懇請なされると、そのまごころをしりぞけることはできず、お受け取りになった。張嬪がつくろった服も、世子がとりつぎ、請い願われたので、お后は世子の真剣な孝心と顔色とを見て、やむをえずにお受け取りになった。悲しいかな、奸人の禍がこの中にこめられていたことをだれが理解しえよう。世子もすこしでも知っていれば、御自分の母親の過失を押しとどめになったろう。どうして飲んでお進めになるようなことがあったろう。たとえ張嬪の腹から誕生したとしても、世子はおだやかな慈愛の誠を中宮からこうむって、実の母子として過ごされた情がおありになる。他の後宮の女性方は親しく行き来して、和気あいあいと穏やかなあわいであつたの

が、ひとり張氏は別であった。張氏にとって世子はみずからの腹をいためた子ではあったものの、だからといっておのずと互いに相いれるというものでなかった。母子の間といえども衷心からの諫言が有効ということなく、平生は何も顔色には出さずに、恭順になさっているよう、世子は張氏にお願いなさったのだが、それがやがて終生の恨みの種となってしまったのだった。

お后は張氏のさし上げた服をお召しになることがなかったものの、殿中に巣くう妖孽どもが外で怒り、房中で殺気を奮い立たせて、この年の五月、病がふたたび沈重となり、病床からお起き上がりになることもなくなられた。大殿では王様がおおいに憂悶し、薬疔に連絡して、お后の兄上の閔判書らに命じて薬を吟味させ、病側に侍っているようお命じになった。閔兄弟らは至誠をもって看護していたが、お后はそれを見ると悲しくて、涕泣し、弟と甥をさとして、おっしゃった。

「いたずらにあなた方の官職が高く、世評も高いのが心配です。みずからの職分をわきまえ、身の処し方に気をつけ、父祖の清徳をけっして汚すことのないように。そうして、保身の策に努めて、忠義を行うがいいでしょう」

病患中で、長居ははばかりられるものの、たいへん離れがたく、閔公兄弟はしみじみと涙を流し、至誠をもって看護した。医者も室外で侍てさまさまに手を尽くすが、一つとして効き目がない。だんだん病は重るが、これは身外に症状が出る疾患ではなく、邪疾がまことに旺盛な呪詛の毒のせいであるので、それをどうして百草の効能で制御できようか。日昼は正気でいらっしゃっても、晩にはいつそう重くなり、うわ言を無数におっしゃる。重い症状はいつこうに回復に向かわず、原因を他にさとられることもなく、これもお后の厄数が不幸である定めによるのであろうか。

七月には他の症状も加わり、朝夕、危篤の状態であったので、国中が振動し、宮中のものみなが足を空にして、天神に祈り、北斗星を祭った。世子もお側を離れず、孝行のかぎりを尽くされたが、日に日に病は重る一方であった。王様も寝食を廃し、気が気でなく、龍顔は憔悴ききったようであった。お后は御自身がもうろうとした状態であるものの、王様をたいへん心配なさって、お諫めになる。

お后は回復することがないことをおのずとおさとりになり、命じて、医女をしりぞけ、医薬を服されなかったので、王様はそれを聞いて驚いて、薬を手ずからおすすめることになる。

「このような重病で薬をやめれば、回復もおぼつかない。無理にでも薬を服し、

早く快癒して、わたくしの願いをかなえてください」

お后はようやくのこと、心を落ち着けて、おっしゃる。

「私は年も若くて栄華を極めました、何ものかが運命を尽きさせようとするのか、ひと月来、痛みがはげしく、今ようやく死のうとしているのがわかります。薬を飲んででもすこしも効き目がなく、五臓の痛みはいや増すばかりです。王様の御心配なさるのにそむくまいと、あえて薬を服していましたが、もう先の長くないわたくしに、無理やりに薬を飲ませて、苦しみを長びかせないでください」

王様はそれを聞いて悔い、涙を流して、肩をがっくり落としておっしゃった。

「后はどうしてそのような不吉なことをいって、わたくしの心を揺さぶるのか。もし五臓が痛くてたまらないのなら、数日だけ薬をやめて、お心を平安にして、養生をなさい」

王様みずから重湯をおすすめになって、病側にいて、離れようとなさらなかった。はたして、薬をやめた後にすこし楽におなりになったようで、宮中はしばらく静穏であったが、ある日、お后は重湯を数度お召しになって、左右に侍る宮女を見わたしておっしゃった。

「わたくしはもう先が長くないが、お前たちのまごころに対して何をもって報いることができようか。お前たちはわたくしの三年の喪の後それぞれ実家に帰って、父母、兄弟の世話をし、人倫をおさめて生きなさい。そうして、他日、黄泉の国での再会を約束することにしよう」

お后がそうおっしゃったのを左右の者は聞き取って、われを失い、いっせいに顔をおおって泣き出し、お返事することすらできなかった。お后は命じて殿閣を掃除させ、香をたかせ、宮人にささえられて手をお洗いになり、新しい衣服に着がえて、宮女を王様のもとにつかわしになる。王様が来られると、お后は衣装をつくろわせながら、左右の者に支えられて、ようやくのことでお座りになっていらっしゃる。宮人たちはそれを見て悲しみをこらえきれずに涙を流す。王様は気も動顛して、おそばに近づいておっしゃる。

「どうしておやすみになっていらっしゃらないのですか」

お后は玉のような涙をはらりと流し、申し上げる。

「わたくしは一度は後の位を去りましたが、ふたたび聖上の御恩をこうむることはなほだしく、今はこの世に思い残すことは何もございません。ただ血肉を分けた子をひとりも残せず、聖上の大恩に対して万分の一も報いることができません

でした。それが心残りで、今日、終天永訣のときにあたって、九泉の下にやすらかに眼を閉じることができません。どうか、聖上は薄命なわたくしのことなど考えずに、百歳のよわいを安らかにお保ちになられますよう」

王様はおおいに悲しみ、龍涙をこぼして、おっしゅった。

「あなたは どうしてそのような不吉なことをおっしゅるのだ」

そう言ってもあえず、着衣のお袖をお濡らしになる。お后はお心を乱されているが、どうして王様のお悲しみがわからないことがあろう。涙を流し、長くため息をついて申し上げなされる。

「聖上は玉体をお大切になさり、死んで行くわたくしの心を安心させてください」

そうして、世子と王子を前に座らせて頭を撫で、後宮の婦人たちを前に進ませ、おっしゅった。

「わたくしは命運が不足して、六年の苦楚を経験したが、ふたたび聖恩をこうむって後の位に昇り、世子と王子の忠孝を見てすでに四年になろうとしています。だが、今日死んで、やはり薄命でないとはいえますまい。あなた方はわたくしの薄命などをまねることなく、聖上とともに万寿をまっとうなさるように」

延訥^{ヨンニ}君はこのとき八歳であった。お后は手を取って、悲しみにくれて、おっしゅる。

「この子は利発で、わたくしもずいぶん可愛がったが、その成長する様子を見とどけることができなくなってしまった」

そうおっしゅって、夫人たちを退出させ、閔公兄弟と甥とを引見して嗚咽し、悲しみに耐えかねていらっしゅった。兄弟たちも拝伏して、やはり嗚咽して、言葉も出て来ない。王様はそのさまを御覧になって、お心がくずおれそうで、とても正視することがおできにならない。王様が食事をてずからおすすめになると、お后はすすり泣いて、ため息をつき、一口、二口だけ味わわれる。王様は枕をなおしてお后をやすませになったが、しばらくたって、昌慶宮景春殿において、お后はついに お亡くなりになった。辛巳の歳（1701）の秋、八月十四日巳の刻で、復位して八年、おん歳は三十五歳であった。

宮中に哭声がとどろいて、鬼神がみな騒ぎ出したよう。宮女たちがたがいに頭をぶつけ、嘆き悲しむが、王様の嘆き悲しまれる様子はさらにはなほだしい。大地を

たたいて、放声し、大哭をなさる。龍涙がおびただしく流れ、御着衣が濡れ、宮中のものみな、そのお痛わしいお姿をととても仰ぎ見ることができない。朝廷と士庶人の悲しむこと、みずからの父母の喪にも増すほどで、それもあのように淑徳聖行のお后が亡くなったのだから、当然のことであった。礼にのっとりて入棺し、喪に服し、四時の供祭にも王様はみずから臨まれ、哭拜して、哀痛なさることが日々に加わったので、宮中のものの心配はひとかたではなかった。

九月四日、王みずからお出ましになり、供養を行われたが、そのとき、祭文を作り、礼官にお読ませになった。その祭文にいう。

「某年某月某日、国王は簡単な供祭を行い、亡くなった王妃閔氏の前に告げる。

ああ、賢后が崩じなされた、夢かうつつか、月が行き、日が入れ変わっても、わたくしは自失して、分別できない。とどめようのない天数が尽き、音容が頓絶し、いまやその死は歴然としている。古人が妻を失った失耦の歎きと叩盆の痛みを教えたが、わたくしの悲痛と遺恨とは古今に比較し、彷彿させるものがないほどはなはだしい。

ああ、賢后は名門に生れ出で、兄者の教訓を受けた。抜きん出た才質と美しい性行は葛草樛木といったさまですばらしいものがあつた。しかるに身運が不幸で、わたくしの不明のために、六年の廃位の事態に立ち至ってしまった。その不遇の時節に処身をむしろ平安にし、混乱のときに当って徳行をむしろ平静に積み重ねて、わたくしの過失を世間に隠しおおせたのは、これもまた賢后の聖徳であつた。花のように美しい孝節と正しい徳が宮中に満ち、道を行い、泰平をとともに享有せんとしていたものを、どうして蒼天は賢后を突然に奪い、わたくしの願いをすっかり空しくしてしまったのか。

ああ、賢后は安らかに亡くなって、万歳をすこやかに過ごそうが、わたくしはこれからの長い余生に悲しみをどうして耐えしのぼうか。

ああ、賢后の清らかな資品で一個の血肉も残さず、あのような聖徳でもって、長寿を享有することのないのは、天道があまりに無心過ぎよう。これは、わたくしの徳を失い、福のないことを天が憎み、わたくしに窮まりのない恨みをなそうとするものだ。通明殿を見るごとに賢后の德音と儀容をいまだ聞き、見るようで、これに行幸の歩みがさえぎられること限りなかつた。わたくしがかつて徳を失つたことがなく、今まで過失がなかつたとして、それで賢后が亡くなったとしても、悲しみは限りないものであるのを、わたくしの過失で六年の苦楚を強いた

ことを考えると、まことに愕然たる遺恨が生じ、酔い狂ったごとく、わたくしの胸をかきむしる。

祭文の冗長を恐れ、これで止める」

読み了えるや、王様は大声を放って、大哭をなさったが、その哭声とお涙が人々を感愴たらしめ、左右の侍臣もみな涕泣して、あえて王様を仰ぎ見ることはできなかった。

お後の諡号を仁顕王后として、陵号は明陵、高陽に作り、陵殿は景延殿と名づけられた。王様は大臣に命じて、

「陵のお守りを至誠をもって行うように」

とおっしゃった。また、陵墓の上室を開けさせて、

「いづれ、わたくしをここに葬れ」

とお命じになった。葬礼の日を選んで、十二月八日、お后を埋葬なさった。ああ、人の寿命は人力の及ぶものではないが、お后は賢哲、聖徳でありながら、ついに子がなく、短命であった。

それも奸人のたくらみをこうむってのことであつたが、どうして天道は回りめぐって来ないであろう。立派な人でも福を享けるのが難しいとすれば、いわんや悪人が、どうしてすこやかに一生をまっとうできようか。

ところで、張禧嬪はお后が病患の間、二度ほどお見舞いにかがった後は、病を称して伺候しなかった。お后はその心根がいつわりに満ちて正しくないことを知っていて、知らないふりをなさっていた。張氏はお后を中宮とは呼ばず、閔氏と呼び捨て、日々、巫女と術士に呪願させ、ついにお后を死に至らしめたので、おおいに喜び、おおいに楽しみ、揚々と自得していた。神堂を即刻こぼって罪を隠すことは念頭になかった。発覚すれば世子と嬪とに有害だとして、ようやく巫女と術士たちが相談して、九月七日に呪術をやめて、神堂はそのままにして置いたが、これも人のみずから陥りそうな落とし穴といえよう。このとき、王様は亡くなったお后のことを思つて、どの女性のもとをもお訪れにならなかつた。月下に悲しみ、朝夕に哀痛し、お顔がすっかりおやつれになつたので、諸臣が諫めると、王様は愀然としておっしゃる。

「わたくしは夫婦の情として悲しんでいるのではなく、後の徳を惜しんで、昔日のことが忘れられないのだ」

諸臣は感愴の思いをひとしお深くした。

九月七日になって、秋気がさわやかで、月がさえて、心思が凄凉として、燭に対してひとり、王様が龍涙を落として、机によりかかってしばらくうとうとなきっていると、夢かうつつかのさかいに、死んだはずの内官のひとりが現われて、申し上げた。

「宮中に妖邪の気配が旺盛で、そのため、お后が惨禍にお遣いになりましたが、この後、大禍が火のように起こりましょう。聖上はどうか事態をお察しくくださるよう、伏してお願いいたします」

そういつて、手を上げて就善堂を指し示し、王様をお導き申すので、王様が行って見られると、そこはお后をお祭りする魂殿であった。その殿上にはお后が侍女をしたがえて座っていらっしゃったが、顔色は惨愴としていて、哀しげに、王様にお告げになる。

「わたくしの命数がたとえ短いものであったとしても、毒を盛られて死なないでもすみませんでしたように。張女が千百もの呪詛をほしいままにし、わたくしはその妖術の害をこうむって、寿命でもないのに横死してしまったのです。張女は不共戴天の敵ともいうべきで、わたくしの怨魂は雲間にただよったまま恨みを抱き続けています。そこで堂々と張女を亡きものにするために、聖上みずから分別して、黒白の決着をつけ、怨讐をはらしていただきたいと思うのです。そうして妖邪をなくせば、宮中はまた平安になることでしょう」

王様はおおいになつかしがつて、お后のお着物をつかまえて、お話しをなさろうとしたが、まさに南柯の一夢であって、お後の姿は空しく消えてしまった。

燭影は輝煌として、左右の宦官たちは外に侍して座っていたが、みなおおいに悲しみ、痛哭した。左右の者に時刻をおたずねになると、初更とのことであった。そこで、一刻も猶予を置かず、王様は玉轎に乗り、行列が目立たぬようにし、左右の者にも気配をさとられぬよう沈黙を命じて、永肅宮におわたりになった。この宮に御無沙汰なさること七、八年に及んでいて、だれが突然の王様のおいでを予測しえたであろうか。

この日はちょうど張嬪の誕生日で、淑正がやって来て、祝いを述べ、ことにお后を謀殺したことを祝賀した。側にいるすべての宮人たちが功を争って、手柄話をし、神堂では巫女、術士たちが説法して、だれも気がつかない間に、王様の御

一行が入って来られた。宮女たちは驚いて、急々に立って迎えようとするのだが、どうすればいいかわからず、そのあわてようといったらなかった。

王様は宮人たちの手柄話を立ち聞きして、心中に大怒し、黙然とその様子を観察なさっていた。宮女たちはたかが禧嬪の誕生日で、お后のというわけでもないのに、何を血迷ったか、分に過ぎた御馳走を用意していたのを、王様は冷笑し、遠くを一瞥なさった。すると、向いの堂では灯りがともっていたのが、みな消えて、ひっそりしている。お疑いが生じて、扉を開け、堂内に入って御覧になると、そこでは屏風をかたづけようとしていたが、宮人たちはあわてふためいて、壁上に一つの画像を忘れたままであった。子細に見ると、それはまぎれもなく関後の絵姿であった。呪いでうがたれた穴が無数にあって、ずたずたのありさまであった。

「これはいったいどういうことだ」

と、王様がお問いつめになると、左右の者はどぎまぎして、だれも言葉がなく、ひとり張女がしゃしゃり出て、申し上げた。

「これこそはお后の画像。その聖徳に感激して、その絵姿でもお慕い申そうとしたのです」

王様はついに怒りを発して、おっしゃった。

「后を慕って飾ってあるのなら、あの無数の穴は何なのだ」

張女が返答に窮するのをそのままに、おつきの内官に燭を取らせて西便堂に行って御覧になった。なんともまがまがしい神堂のさまに、王は怒りを発し、庁舎に座って、宮奴を呼びつけ、宮女みなをとらえて、縄をかけさせ、きびしくいましめて、おっしゃった。

「わたくしもうすうすう気づいてはいたが、今、宮中の妖悪な事どもをすこしでも隠し立てしようとするれば、即座にお前たちを殺してしまおう。すべてを白状するがよい」

そのお怒りの声は震えて、突然の雷声のようで、きびしい気運は霜雪のようであったので、どうしてみなあえて隠し通すことができたろう。その中でシヨンというものは奸悪な人物で、知らを切っていたが、拷問を受けて皮肉がそぎ落とされ、それを見て諸女が一時に罪を認めて申し上げ、前後の事が一つ一つつまびらかになった。王様はあらためて身の毛がよだつように感じて、おっしゃった。

「虎を飼って害に遇ったとしても、はたしてこれほどのことがあろうか。わたくしが張女を退けずに、そのままに置いたのは、大禍の種をみずから播いたのだっ

た。こんな恥は隣国に聞かせてはならないことだ」

そうおっしゃって、侍女たちを義禁府に下し、次の日、みずから訊問することとし、外殿にわたって、一睡もされず、翌日、内と外に向けて、言明なされた。

「后が非命に冤死したこと、ならびに張禧嬪の大逆不道と凶謀奸悪なること、いづれも隣国に聞かせられない国家の恥である」

また、

「済州島に流した張希載を罪状を書いて天日にさらして処刑せよ。逆律の罪人、謀逆の類として厳罰に処するのだ」

とおっしゃる。また、

「内需司のチュンサンとチョルヒャンらは義禁府にとらえ、仁政門で切っ飛ばえ」

と命じられたので、承旨の尹吏部は地に伏して、申し上げた。

「禧嬪の罪悪ははなはだ重うございますが、世子のことを考えて、お怒りをおおさめください」

王様は怒りがとけず、

「張氏を始め宮中に入れたのは、世子のことを考えてのことであつたが、宮中に神堂までこしらえ、ひそかに呪詛を行って、中宮を謀殺した。そうした窮凶極悪、大逆無道というのは千古にないものだ。わたくしがみずから問責して、罪を明らかにし、亡き後の靈魂をなぐさめようとしているのに、承旨め、逆賊を弁護しようとする。義禁府で処罰しようとするのを、臣下の分際でとどめようとする。国母を殺害した怨讐ははらさずに置くことができようか。なんともわが心を寒々とさせる奴だ、尹の官職を剝奪して門外に追放せよ」

そうおっしゃって、今度は獄に下した罪人のチョルヒャンを杖叩きにさせなされたところ、

「乙亥の年(1695)より、神堂を作って、巫女・術士が、お后が亡くなり、張氏が復位するよう祈願して、お後の画像をかけて釘を刺して、何ごとかをいっておりましたが、その意味はシヒャンなどが知っており、わたくしは知りません」

と白状した。そこで、シヒャンを拷問したが、この者の年齢は二十三歳であつた。

「禧嬪が張希載の妾の淑正と書簡の往来をして、淑正の手紙を受け取って読むやいなや、たいへん喜んだようでした。そのわけはわかりませんでした。さっそく淑正を呼びつけて、さまざま凶事を行わせました。中味は存じませんが、小

さな柳行李をチマの中に包んで、チョルヒャンとわたくしめがいっしょに、ある日の夕方、通明殿の左側、池のほとりのところに埋めました。また、何やら封をしたものを作って、賞春閣のお役所の石段の下に埋めました。わたくしめはチョルヒャンなどといっしょに行きましたが、その中味はさっぱり存じておりません。その日、チェヨンが『仕事は片付けました』と、嬪に告げると、嬪は『シヨンやチョルヒャンもことのわけを知っているのか』とおっしゃいました。そこでチェヨンは『いっしょに行きましたが、シヨンやチョルヒャンごときに嬪の本音とたて前とが異なることがどうして理解できましょう』とお答えしました。わたくしは何も知らずに、勢を集めて、謀逆に加勢しようとしていたのです」

シヨンは四十一歳であった。妖悪ではあったが、あえて隠し立てせず申し上げた。

「骸骨に五色の緋緞であつらえた服を着せ、お後の生年月日に姓氏を書いて埋めました。あるいは、骸骨を粉に砕いてお着物に内綿といっしょに入れ、そのお着物で骸骨をくるんで埋めました。そのお着物を取り出し、中宮にさし上げたがお受け取りにならず、翌年の誕生日に、春宮のお顔を立ててお受け取りになりました。前日申し上げましたとおり、呪術と妖孽を行ったこと、凶事のいたりでございますが、これらはすべて張希載の妾の淑正の行ったことでございます」

ただちに、王様は淑正と巫女・術士たちをとらえて来させ、きびしく聞いたでして、おっしゃった。

「さきに張希載を重用して、任地に行かせるとき、銀子を多く与え、妹を嬪に推したのだった。しかるに、いやしい奴ばらが恥がましくも宝貨を貪り、大欲を起こそうとは、まことにうかつであった」

淑正を拷問したところ、白状して、申し上げる。

「禧嬪が毎日わたくしのところへ宮女を送って、王子の服をこしらえるときには、わが子にも幼児服をこしらえてくださり、時々には宝物をたくさん送ってくださった。それで、『就善堂で哭声がし、禧嬪が病にお伏しになった』といつては、わたくしが魂呼びをしました。巫女と術士がお后が亡くなるよう祈り、失寵を祈って謀りごとを行いました。まさにお后が亡くなろうとなさるときには、みな集まって、一心に祈りました。お后のお着物をわたくしがくすねて来て、骸骨は希載の小者のチョルヨンが手に入れて参ったものです」

チョルヨンをとらえようとしたが、すでに身をくらましており、人相書きを回し

て、数日後にとらえたのだった。

「わたくしは希載と死生の誼みを交わしており、たまたまわたくしが故郷に帰るとき、希載が銀子を多くくれて、『禧嬪の守り神を探して来てくれると、ありがたい』といったものだから、この朝鮮八道におぞましい骸骨を持ち帰ったまでのことなのです」

チョルヨンが一気にそれだけのことを吐き出したので、居合わせた侍臣たちは身の毛をよだたせ、方々に埋っていたものを掘り出すありさまは、まがまがしく、おどろおどろしくて、とても言葉にあらわしようがない。お后のお着物を持って来させ、綿を切り裂いて見ると、はたして青白い骨粉が出て来る。王はおおいに怒り、惘然として、ため息をついておっしゃる。

「まったくもって、わたくしが不明なために、宮中にこのような変が生じてしまった。これは隣国に聞かせてはならない恥である。他日、黄泉の国で何の面目があつて後に会うことができようか」

同日、罪人十四名を軍器庫において処刑し、その他の宮人と馬直などはみな遠くへ流すことにして、おっしゃった。

「国母を謀殺するなど、これ以上はない重大な犯罪である。なのに、不道の臣下は連日のように、『獄舎に入り込み、みずから拷問なさるなど、とても仁君の体面ではない』といて、言葉をもてあそんで、わたくしを諫める。どうして、お后を謀殺した輩をそのまま放って置いてよかろうか。おろかな諫言を弄する不屈きな臣下もまた国家の患いである。みな辺地に左遷してしまえ」

このとき張嬪を本宮に閉じ込め、処遇をお考えになり、即刻、斬首なさろうとしたが、父子は五常の大倫で、世子の顔を見るにしのびない重刑をよくなしえずに、おっしゃった。

「今、張女を斬首したら、かえって罪がとどまろう。世子の情理を考えて、減刑して、身体は切り離さずに保全することにしよう」

そういって、器に毒薬を盛って、みずから宮女に命じて持って行かせ、おっしゃった。

「お前は大逆無道を行い、どうして薬を賜わるのを待つのか。早く死ぬべきであるのを、何とも妖悪なる者があわよくば生き永らえようとして、晏然として天日を見ている。これもまた死罪に値しよう。ただ世子の心をおしはかり、身体は保

全して死ぬことができるのが、おまえにとっての栄華である。早く死んでしま
うがよい」

このとき、張氏の罪悪が露頭して、一国が騒擾したが、この妖悪で毒々しい女は
すこしも臆した風もなく、お后を殺しおおせたことを喜んでいた。両の眼でぎょろ
りとにらみつけ、自分を毒殺しようという薬を見て、高い声を出し、悪態をつい
て、

「わたしには何の罪もないのに、どうして死薬を賜わるのか。わたしを殺すのな
ら、わたしの息子をまず殺せ」

と叫び、薬の器をひっくり返し、宮女に号令した。宮女は力づくで飲ませることを
せず、ひっ返して王様に上達したが、王様は怒って、

「わたしの眼前で死なせるには、お前を見るのがけがらわしく、薬を送ったの
だ。お前も恥を知るのなら、みずから死んで、世子のためにも人の手をわずらわ
せないのがよかろう。なのに世子の力を頼んで、だれに悪態をつくのか。この薬
がお前にとっては霜刃のかわりの恩恵だということを知らず、罪の上に罪を加
え、三賊の律を受けないようにせよ」

とおっしゃった。宮女はふたたび帰って命を伝えたが、張氏は足を蹴り上げ、逆手
を打って、言いつのる。

「閔氏が短命で死んだことが、わたしに何の関係があらうか。お前たちはわたし
を殺して、後日、世子からきつと殺されることになるう」

張女がおぞましい声で悪態をつくのを耳にして、王は憤然としてお興を召して、
永肅宮に出向かれ、庁舎にお座りになる。左右の者に命令して張女をひきずり出さ
せ、堂下に降ろして、しかりつけておっしゃる。

「中宮を謀殺したお前の大逆無道は天地に明らかであり、当然、頭と手足を断ち
切って、天下にさらすべきである。それを世子の顔を立てて、特別に恩をかけて
軽罰ですませるのだ。なのに、お前は傲り高ぶって、罪をいっそう加えようとし
ている」

張女は眼をかつと見開き、天顔を仰ぎ見て、声を張り上げて答える。

「閔氏がわたくしに怨みを抱いて死んだとしても、わたくしにどんな罪がござい
ましよう。天下が政治を明らかになさなくては、仁君の道理が立ちますまい」

そういって、殺気が立ちのぼる。王様は怒り、天顔を高く上げ、袖をふるい、声
をふるわせておっしゃる。

「千古にこれほど妖悪な女がいたであろうか」

左右の者が毒薬を飲ませようとするが、張女は宮女をなぐりつけ、あばれて、悪態をつく。

「どうせなら、世子といっしょに死にましよう。わたくしにどんな罪があるといのです」

王様がますます怒って、

「左右でしっかりつかまえて飲ませるのだ」

とおっしゃったので、女たちが飛びかかって腕をつかみ、腰に抱きついて飲ませようとしたが、張女は固く口をつぐんで飲もうとしない。王様はさらに怒りをつのらせ、

「棒で口をこじ開けて毒を流し込め」

とおっしゃったので、女たちは棒で口をこじ開ける。張女もこれには観念して、泣き声で哀願した。

「天下はわたくしの罪を見ずに、昔日の情を振り返り、二人のあいだに生れた世子の顔を御覧になって、どうかわたくしの生命をお助けください」

王様は聞きも入れず、早く薬を飲ませようお命じになった。張女はそのむごい言葉に雨のように涙をこぼし、王様を仰ぎ見て、みじめたらしく申し上げた。

「この薬を飲み下して死んで行く前に、世子をもう一度だけ見て、九原に恨みを残さぬようにしたいものです」

奸悪な心をもって、凄凉たる言葉で哀しげに訴える。しなを作って人の心を奪おうとして、あわれではあったが、王様はすこしもお心をお動かしにならなかった。三杯の毒を張氏の口に注ぎ込むと、張氏はまもなく大きな叫び声を上げ、石段の下に転げ落ち、血を泉のように噴き出した。一杯だけでも五臓がみな溶けてしまう毒を三杯も飲んで、すぐに身体の七つの穴から黒い血が噴き出し、地面に流れた。あわれ、卑小な宮人の身でもって千乗の国母を謀殺し、天寿をまっとうしようとしたのだったが、天がどうして殃禍を下さないで置こうか。王様はその死を見て、儀礼にもとらないよう、死体を本宮に送らせ、命令をお下しになった。

「張女は罪が重く、殃法を行ったが、母子の情愛というものがある。世子の情理をおもんばかって、簡略に礼葬せよ」

張希載は身体をばらばらに切り離して殺し、家財は没収したが、一国の臣民は爽快に感じ、喜ばないものはなかった。張氏のようなものの屍体をだれが誠を尽くし

て収めることをしようか。血まみれの服に巻かれ、塩醬をまぶされ、宮外に出し、房中に寝かせて、王命を待って殮葬しようとしていた。ところが、入棺しようとしたとき、一夜の内に、身体は腐敗し、黒い血がただれ、身体は膨張してしまっていた。刑を軽くするまでもなかったのだ。

希載の屍体は葬ろうとする者としてなく、人心がみな切齒腐心して望むため、人ごとに申しにさせ、さらし首にした。人倫の根本を考えないような者には、殃禍はすぐにふりかかって来るものだ。時にあって、常漢賤人に過ぎない者でありながら、君側を往き来したが、そのままとどまり宮殿の貴人として栄華を味わうことができたものを、貪る心を起こし、大逆を謀って、この状況に立ち至ったのだ。世間の人びとも他山の石とすべきである。

王様みずからがこのように獄事を決して、四月十三日に当って、魂殿におもむかれ、祭文を作って、お後の供養を行われた。その祭文にいう。

「賢后が雲間に昇って、はや多くの日月が過ぎた。後の音容が深くわたくしの胸に沈み、思いが日ごと、月ごとに加わって行く。前日を悔い、今このときを悲しみ、恨みが骨髓にしみついてくる。わたくしは賢后が奸人の害をこうむって、非命にして死んだのを悟ったのだ。大逆の奸人が窮極なる変を起こし、神堂を作って内で妖邪を行い、凶孽の害が後の身上におよんだのだった。その病状に耐えていた姿を思えば、心臓が破れんばかりだ。後の賢徳と善良な性情をもって、一朝にどうして奸人の害を受けたのか。また閔氏の家は積み重ねた徳があるのに、どうして救いがなかったのか。

ああ、これはみなわたくしが薄徳で、不明であり、奸凶をさとることができず、大禍をいたずらに招いてしまったのだ。それを悔いると、気も狂わんばかりだ。後は非命に死んで、わたくしは今なお華殿に安居しているが、後の靈魂は雲霄を飛びかかって、しみじみとわたくしを恨むこと深いであろう。

ああ、たとえ死んでも、どうして神の御加護がないことがあろう。後の日月のような精神は散り散りにならず、はっきりと夢となって現われ、教えてくれたので、わたくしはようやくどうして亡くなったのかを理解した。すべてを悟って、奸人をとらえ、妖孽をみな肅清した。妖悪な頭と奸邪な腰とを斧鉞でたたき割り、そして毒薬で殺害した。後の抑えがたい怨恨をこうして晴らしたが、死者はよみがえることはできず、後も生き返ることはできない。それを思うと、悲痛が

いよいよ加わり、恨みをそいでもけっして爽快にはならず、後の精霊もまた幽明の間で悲しんでおられよう。

昔日、后が人心を見透かす不思議な力をもって、『奸人を近づけたり、信じたりなきるな』と云って、始めて坤位に昇られたが、わたくしは暗弱で、さとることができず、大禍をみずから招いてしまった。その後、後の明霊が現われ、教えてくれなかったら、きっと恨みを晴らすこともできず、妖孽がいっそう宮中にはびこり、危亡を見るところであった。明魂の教えを受け、宮中を肅清して、わたくしは蒙昧という評判を免かれることができたが、主だった原因は後の生前の害人と死後の怨讐とであった。後の姿はけ高く、徳が篤く、世子を愛恤なきることは自分の腹をいためた子に対する以上で、その世子をおもんばかりに、禍をみずから招くことになったのだ。

ところが、賢なるかな、後の明哲なる徳性が、生前、臣民の法となり、死後、透徹した精霊が一国の恨みを晴らしてしまった。

ああ、後の精霊が今は晴れ晴れとなさって、わたくしがこのように悲しみに明け暮れても、この世に留念なきらぬように」

読み了えて、大哭なさったが、見、聞く者は涙を禁ずることができない。宮中が新たに悲しみにかきくれるが、世子がいらっしゃるので、あえて口にすることがない。人事を十分にわきまえた上で、世子は、慈母にとって恨みの至りとなる一方で、お後の声望と恩恵を受けることひとかたならぬものがあつたが、夢うつつの間に禍変に遇い、身をどう処していいかわかりにならない。みずから罪人を名乗り、何度も上疏し、罪を請い、世子の位を辞退なさつたので、王は愀然として感じ入り、おっしゃつた。

「母親の罪でどうして無罪の息子を廃せようか。以後、このようなことを口にしてはならない」

世子は門を閉ざして出ず、位を望まずに辞退したため、王様が呼んで、御前に座らせ、手を取って、ため息をつきながら、さとされた。

「お前の母親の快禍は息子にまで及び、骨髓に病を得て、進退をこのように言い出した。お前の母の罪はなるほど死に値するが、わたくしの心も痛む。父子も天成の親であり、父が容恕しているのに、子がどうして逆らうのか。もう二度とこのようなことは言い出さないように」

世子は叩頭して涕泣して、聖恩を感謝し、そのまま位に即いて、平生、窮まりの

ない悲しみを心に抱いていらっしやった。

十二月に葬事も終りを迎え、ふたたび祭文をお作りになった。

「ああ、賢后は名家の賢媛で、孔子の教訓を学ばれた。嘉礼をもって入内し、上は大妃の凡節を見習い、下は宮人の心服を受けられた。政事のころあいが完全で、内助の徳も彬々として完璧であったが、国運が不幸で、わたくしの徳も薄く、後の聖徳をもってしても天寿をまっとうすることができなかった。ああ、悲しきかな、後の足跡をどこに行つてなつかしみ、わたくしの憂いを合せて晴らすことができよう。魂殿に臨み、靈柩に対すると、かえつて、後の温容に対するようで、日月がはや流れ、葬礼の日に至つたが、後の音容と靈柩とが永らく宮中にとどまって出発しない。わたくしはおのずと酔い狂つたごとくであり、後の靈魂があればさらに留念して、泣き叫ぼう。後は生前花ひらいた徳が実を結び、死後、万民の悲しみがまるで父母を失つたかのようにであり、亡くなつても、生前と同じく慕われている。わたくしは長く宿命に対して遺恨をもつことはなほだしいが、どうすれば耐えしのべよう。せめてこの生に山海のような恩誼を感じつつ永訣するとき、後の陵の右辺を空けて、他日同穴されることを願おう。そして、千秋万歳、後の身体と魂魄を一つとして遊ぼうではないか」

葬礼を行った後も、悲しみはいっそう深くてこらえきれず、閔府に恩栄を賜ふることがたびたびで、以前にまして礼遇なされた。閔府はひたすら恐縮し、兢兢業々として忠を尽くして国家を輔佐した。

国体に後の位が空いたままではすまず、お后を選ぶことになって、慶恩府院君金柱臣の娘が選ばれ、壬午の年(1702)に王妃として冊封し、朝賀をお受けになった。王様は昔日を追慕して涙水が落ち、衣をお濡らしになり、妃嬪も宮女も悲しみに泣き伏した。三年の喪を終えても悲しみは尽きることなく、お後の遺言を考慮して、お後のそばで六年の苦楚に耐えた尚宮十四人に恩をほどこそうと多く賞給を与えることにし、それぞれ民間にもどつてわからなくなつていたので、系類を探して召されたところ、子女たちはたいへん感激して、涙を流し、なかなか宮廷を立ち去ることができなかった。

戊戌の年(1718)、昌慶宮長春軒で世子嬪の沈氏が薨じた。子女がなく、その年

また嬪選びがあって、咸從魚氏を世子嬪として冊封したが、これもまた子女がなかった。

庚子の年(1720)六月初八日卯の刻に慶熙宮隆福殿において王様がお亡くなりになった。春秋は六十歳でいらっちゃった。一国が悲しみにくれ、その聖徳大度と聖神文武とを、万代の英君とたたえた。ふるくから讒訴にだまされた人君が多いが、肅宗大王はすぐにはっきりと覚り、光明正大であることは歴代に第一であった。

王世子が即位なさって、嬪の魚氏を冊封して王后としたが、この王様には病患があり、世継ぎの誕生という慶びを見ることもないだろうと判断して、辛丑の年(1721)に延祔君を王世弟として冊封した。君の夫人の達城徐氏を世弟嬪に冊封して、友愛至極であった。甲辰の年(1724)八月二十五日に昌慶宮環翠亭において王様がお亡くなりになったが、在位わずかに四年で、春秋は三十七歳であった。楊州に埋葬して、王世弟の延祔君が即位なさったが、これが英宗大王である。孝義が天下に抜きん出て、堯舜の道徳がおありになり、五十余年の太平を享有なさったが、これは肅宗大王の余蔭ともいえる。

英宗大王はがんぜなくていらっちゃったとき閔大妃の撫愛なさった恩恵を忘れず、追慕なさることが歳月とともに増し、お后が明哲保身でいらっちゃったものの子がなかったことをおおいに悲しまれた。即位なさった後に、安国洞の本宮に行幸なさり、六年のあいだ苦楚なさった跡をしので、大きな声で痛哭なさり、板を掲げて御筆を執って「感古堂」とおしたためになった。スレコルの閔判書宅はお後の兄の驪陽府院君の邸で、仁顯太后誕生の家でもあり、王はここにも行幸なさって、閔氏一門を閔見する恩恵をお与えになった。当時より今に至るまで、閔氏一門は国家の柱石の臣である。これもまた仁顯王后の謙恭で善良なる徳によって、天心を感動させなさったことによる。周の妊姁の徳が千秋万歳に遺伝して、我が朝の仁顯王后の聖徳が妊姁の後、第一の実例というべきで、まことにうるわしいかぎりであった。スレコルの家と安国洞の家は、閔氏が代々に伝えて手放すことがなかった。

閔后が宮廷をお出になった後、張嬪が内で内応し、奸臣が外で謀議し、お后を毒殺し、閔氏一門を滅す機会をうかがっていたが、天がこれを許さなかったのだ。王様が数年後にすべてをさとることになって、万端をじっくりお考えになり、壬申の年(1692)、一つの夢を御覧になったのだった。夢の中で肅宗の生母であられる故

明聖大妃が顔色を変えて、怒っておっしゃった。

「中宮は東国の聖女であり、わたくしのはなはだ愛するところであるのに、これを廃し、奸悪なる賤人を大位に昇らせたのは、宗廟社稷の恥である。わたくしはあのような女の祭りを受けることはけっしてありませぬ」

大后は怒気でふるえ、退出し、玉輦に乗って、後苑の門から中宮のもとにお入りになった。王様はあわてて後に付いて行かれたが、すべての後門がしっかりと閉ざされていたので、なすすべもなく、たたずみなさったのであった。閔后は無色の衣服で天意をうかがって座っていらっしゃったが、大妃を見てその御恩に感謝なされた。大妃は肩を抱いて、しみじみと痛哭して、おっしゃる。

「天生の怨讐で厄運がはなはだしかったのですが、久しからずして、天運がもどって来ることもありましょう。それまでは健康に気を付けて、奸人たちの思いどおりにならぬことです」

お后に仕える宮人たちがいっせいに憂い声で叫んで、気が付くと、枕上の一夢であった。

大妃のお顔がまっさおで、閔后の謹身なさっている家と、その謹身なさっている様子が凄凉としたものであったことをひとしお悲しんで、王様は感愴するのを終日禁じえず、哀然たる気持ちでいらっしゃった。即刻、後の位に復したいとお思いになったが、国体は重く、軽々しく扱ってはならない。忠勤の人に気色を探らせると、このとき、お庭番はまた宮人の一族で、中宮のために心を一つにするものであった。その者の話では、このとき、お后はみずから謹身なさって、罪が父母および弟に及ばないようになさったから、訪れる人が絶えてなかった。閔后が忠恭と貞念によって気配りなさっていることに天心も感動したのであろうと、王様は夢と思ひ合せになったのだった。だが、奸人が讒訴するところでは、お后がはやく地下の者たちと通じ、人心を収攬して、大逆無道を謀り、神靈に呪願して王様をなきものにしてしようとしているというものであった。王様はそれを耳にされて、天威黙々と行われ、閔后を下念なさることになったのだ。

甲戌の年(1694)に名誉回復して、お后が位に復され、王様は国事の合間にはお后のもとにいらっしゃる。ときおり、

「宮廷におもどりになることをそれほどまでに固辞なさって、わたくしを気詰まりにさせなさる。わたくしは性格があわて者で、じっと我慢することができず、事態をよく考えないで事を起こし、後悔先に立たずといったことが多い。わたく

しが張女をまず制御して、みずから行幸して后をお迎えすれば、体面も立って、中宮の榮華は無窮であったものを。わたくしは十分に考えずに、軽率に事を執り行ったのが残念だ」

とおっしゃった。お后は王のお氣遣いに謝礼なされた。

世子がいつも御前で遊び、美しいくだものと花を持って来てはお后にさし上げ、王様に申し上げなされた。

「永肅宮のお母さんは気が置けて、新しく来られたこちらのお母様は顔もおだやかで、やさしい」

とおっしゃって、珊瑚で飾った美しい刀を持って来て、お后にさし上げ、

「きれいなので、お持ちください」

と申し上げになる。

復位なされた日、王様が内殿に渡られ、府院君をもとにもどすことをお命じになるとき、お后にかたて、

「前の後の母親の号は考えたが、あなたのお母さまの号は考えていなかった」

とおっしゃった。后はそれに対して申し上げた。

「王様がお名付けにならなくて当然で、当方でもまた考えもませんでした」

王はすこしほほえんで、

「后は太姒である。どうしてわたくしが考えないでいられよう」

とおっしゃり、早速お考えになって、職号を書いて、朝廷に下されたので、お后は憾然と、悲しみの気持ちが現れた。朝廷ではわざわざ親筆で命じられた恩榮に感激し、王様にあらためて欽服した。

閔氏の一族の者に新しい職を与えて朝廷に招かれたが、かしこまってあえて受けず、辞退して参内することがなかった。王様が何度も恩恵を特別にお与えになったので、やむをえず、参内することにしたが、そのときの風体はさすがに凜然としていた。王様は礼遇をこの上ないほどなされて、お后におっしゃった。

「平生、喜ばしいことなどなかったが、中宮が復位してここにいらっしゃる、これ以上の喜ばしいことはない」

大体において、肅宗大王は聖徳文武であって、わずかな間、昏暗であったが、一朝におさとりになり、千秋万歳に誇るべき英傑の君主というべきである。仁顯王后の亭々たる聖徳と霜雪のような礼節は今に至るまで欽頌する者が多い。

うるわしい朴泰輔の忠誠は古今にないもので、後世人民のお手本となるところ。